

『義と認められて』(ルカの福音書 18章 9-14節) 2022.11.13.

<はじめに> 「自分は正しい」という自覚が、時に社会や人間関係に様々な現象を生む一因ともなっています。ならば正しいと主張しない(できない)方がいいのでしょうか。この物語は「正(義)しい」がテーマで、正しい人物が出てきます。

I パリサイ人の祈り(11-12)

①その人物像

彼は生活の中で避けていたこと、取り組んでいたことがあります。人に流されることなく、道徳的、社会的、宗教的に正しく生きていました。それは周囲からもはっきりわかります。パリサイ人はその代表です。

②彼の祈り

彼は宮のどの辺りに立って祈っていたのでしょうか。彼は心の中で祈ったのですが、イエスはそれを明かされます。その祈りは、誰に向けて、何のためにささげたのでしょうか。

③その評価(14)

イエスは、義と認められたのはパリサイ人ではない、と明言されます。このことにパリサイ人は気づいているのでしょうか。正(義)しいと認めるのは神です。なのにパリサイ人は、自分自身が正しいと確信し、祈りを通してそれを神に主張し、認めさせようとしていたのです。

II 取税人の祈り(13)

①取税人

税は「取られる」と感じます。当時、ユダヤ社会はローマ帝国の植民地で、税もローマに吸い上げられ、同胞から税を集める取税人は罪人呼ばわりされていました(19:7)。

②その祈り

取税人はどこから「遠く離れて立」っていたのでしょうか。「目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいたのは何故でしょうか。彼の祈りから、彼がどんなことを意識していたと分かるのでしょうか。「あわれんでください」とは別訳では「お赦しください」とも記されています。

③その評価(14)

彼が罪の赦しを神に祈り求めたのは、神は罪を赦す方だと捉えていたからです(詩篇 32:5、130:4)。イエスはこの取税人が「義と認められて家に帰った」と言われます。それを彼は自覚できたのでしょうか。詩篇 32:5-7 にはどう書いてあるのでしょうか。

III 私たちが祈るのは

①正しさの基準に照らすため

人の世では正しさが混迷・対立しています。人は正しさを主張しますが、その基準となり得ません。公正なのは神のみです。私たちは神の御前に進み出て、神が正しいと認めてくださるか否かを探り、吟味するために祈っているのでしょうか(箴言 21:2)。

②正しい者とされるため

神の御前に自分を探ると、過ち・罪を見出すでしょう。神は罪過ちに気付かせると同時に、それを赦し、そこから救い出そうと働き掛けてくださいます。その招きを受け入れた者を、神は義と認められ、いのちを与えられます(ロマ 5:18)

③自分を低くする

自虐的に自分を低く見ることはありません。そう決めつけているのも自分であって、根はパリサイ人と同じ高ぶりを抱えています。自分を低くする者を至高者なる神の前にへりくだります。神はへりくだる者に恵みを与え、正しい者へと引き上げられます。

<おわりに> 正しい人は悪い人を見下しがちです。そこに危惧を感じてイエスはこのたとえ話を語られました。イエスは心の中の思いを読み取られます。祈るから正しいのではなく、正しい者へと造り変えてくださるようにと祈るのです。(H.M.)